



チョー・ソンヨン



菅きよみ



朝吹園子



佐藤泉



西澤誠治

懸田貴嗣
Photo: K.Miura

大内山 薫



寺神戸亮が名手たちとともに贈る バッハ協奏曲



が名手たちとともに贈る

ブリュッセルを拠点に、バロック期のヴァイオリン演奏の第一人者として国際的に活躍している寺神戸亮さんが、腕利きの名手たちともにお贈りするバッハの協奏曲の名作の数々。ヴァイオリン協奏曲との出会いやバッハ観について、寺神戸亮さんにお伺いしました。(抄録)

Q 寺神戸さんが初めてこの2つのヴァイオリン協奏曲に出会ったのは何歳頃のことですか？その時の思い出などは併せてお聞かせください。

恐らく小学生の頃、まず第1番をやりました。きれいな曲だと思いましたがそれ以上の特別な思いは抱きませんでした。ただ、初めて有名な作曲家の曲を弾いたので嬉しかったのを覚えています。第2番の方は発表会で他の人が弾くのをよく聴いていたのですが、なんと皆

が弾くのをよく聴いていたのですが、なんと皆がカーポの前で終わっていました。先生の指示だったのだと思いますが、ずいぶん尻切れとんぼな感じの曲だなあ、自分は絶対発表会では弾くまい、と思っていました。実際その後第2番を勉強したのかどうか、記憶がありません。

Q バロック・ヴァイオリンをお始めになってから、これらのヴァイオリン協奏曲を改めて弾いてみるようになって、音楽の感じ方や作品の捉え方にどのような変化がありましたか？

留学前のこと、後に師となるシギスヴァルト・クイケンとランプティット・バンドの録音で、歯切れの良さ、生き生きと躍動するリズムと

叙情性に心を奪われました。特に衝撃を受けたのは第2番の最初、短く、勢いのある3つの和音に2発でノックアウト、完全に魅了されてしまいました。その後自分で演奏するようになって自分なりの発見が多々あり、師の演奏とはまた違ったものになっているとは思いますが、最初に衝撃を受けたこの演奏に影響を受けていないと言えは嘘になります。

Q 寺神戸さんにとって「J.S. バッハ」とはどのような存在ですか？

バッハの音楽は緻密ですが、それが親しみやすいメロディーに彩られていて、思わず歌いたくなるようなシンプルさも持ち合わせているのが不思議です。また、地方色豊かだったバロック時代の音楽を初めて国際的で普遍的なものにしたと思います。色々なスタイルの融合、古い音楽と新しい音楽の融合と、縦・横両方の軸での融合が、それぞれ非常に高い次元で行われたことが、バッハの音楽を現代にまで生き残らせる原動力になったのではないのでしょうか。自分自身、バッハを知れば知るほどその奥深さに圧倒され、さらに引き込まれて行くのを感じます。

寺神戸亮が
名手たちとともに贈る
バッハ協奏曲名作選
2014年
1.23(土) 19:00